



フジ

147 編も、ハレルヤ（神をほめたたえよ）に始まり、ハレルヤで終わる 7 連の詩篇です。

最初の ハレルヤ。わたしたちの神をほめ歌うのはいかに喜ばしく／神への賛美はいかに美しく快いことか。(1) との言葉から、この詩編の詩人は詠唱者、聖歌隊に属する人ではないかと想像します。賛美することが喜びであり、メロディや、ハーモニーが美しいだけでなく、その歌われる文言が心に響き、魂を震わせ、生きる喜びが与えられるからでしょう。

続いて、主はエルサレムを再建し／イスラエルの追いやられた人々を集めてくださる。(2) との言葉から、神殿の立つ都エルサレムが崩壊し、民も、捕囚となる者、追放される者、避難する者など、離散せざるを得なかった過去の悲しい有様や、再建途上にある苦しみの中から歌われています。苦難を味わった者にとっ

て、共に賛歌する時が与えられることは、打ち砕かれた心の人々を癒し／その傷を包んでくださる。(3) との言葉どおりです。私たちがコロナ禍にあり、集会を制限されている今、また、ウクライナで戦禍に苦しむ人々の心からの願い、叫びと全く同じです。

2 連の 主は星に数を定め／それぞれに呼び名をお与えになる。(4) の次に、3 連の 主は天を雲で覆い、大地のために雨を備え／山々に草を芽生えさせられる。(8) 獣や、鳥のたぐいが求めて鳴けば／食べ物をお与えになる。(9) を挿入して、わたしたちの主は大いなる方、御力は強く／英知の御業は数知れない。(5) 主は貧しい人々を励まし／逆らう者を地に倒される。(6) 感謝の献げ物をささげて主に歌え。豎琴に合わせてわたしたちの神にほめ歌をうたえ。(7) と続ければ、滑らかに流れます。

4 連は、自然を愛される主は、馬の勇ましさ も知っていますが、馬は権力者の武力の象徴です。主は勇ましさ、力には目を向けず、それを全く望まれず、逆に、主が望まれるのは主を畏れる人／主の慈しみを待ち望む人。(11) と、謙遜で助けを求める人であると述べます。

5 連で、詩人は 追いやられ・打ち砕かれた 人々に、エルサレムよ、主をほめたたえよ／シオンよ、あなたの神を賛美せよ。(12) と命じます。主はあなたの城門のかんぬきを堅固にし(13a)／あなたの国境に平和を置き(14a) と、主が安全と平和を与えられるからです。これこそ民の望みです。

6 連は、不思議な表現ですが、人には堪えられないような 雪・霜・氷塊 のような苦難も、主が 御言葉を遣わされれば、それは溶け／息を吹きかけられれば、流れる水となる。(18) と、主の御言葉、仰せが与えられ、それによって生き返らされることを望んでいます。

最後の 7 連では、主はヤコブに御言葉を／イスラエルに掟と裁きを告げられる。どの国に対しても／このように計らわれたことはない。(19, 20) と、選民意識に立ち、賛美しています。

『讚美歌 21』は 48「主をほめうたえ」 <https://sanbika.blog.ss-blog.jp/2012-08-08> を挙げています。これは 1949 年、フランスのテゼ村で設立されたエキュメニカルな祈りの共同体「テゼ」の讚美歌です。シンプルな形式で輪唱による賛美が特徴となっています。

ジュネーブ詩編歌はリュート、バロック・ギター、ビオラ・ダ・ガンバの重奏です。

<https://www.youtube.com/watch?v=jAbKqJfumi4&list=PL15DF46D76CA72F5E&index=147>